

# 笑顔の力

孤 蓬 生

ウイリアム、ハットンといふ有名な數學家の許へ  
 或る上品な田舎の婦人が、切に話したい事がある  
 といふので尋ねて来た、婦人は内々で、其夫とい  
 ふ人が、婦人に無情く當つて、毎晩外へ出て行つ  
 て、自分は其が實につらい、で貴方に伺つたら、  
 何うかよい方法はあるまいかと、それで来たのだ  
 といふ事を告げた、斯ういふ事はよくある事だ。  
 忠告者としての評判を落さぬ様に考へられぬ事は  
 ないと考へて「それは譯はない、斯うすれば間違  
 いとはない、いつでも笑顔で御主人をとよりもちな  
 さい」と答へた、婦人は大に感謝して行つた、二  
 三ヶ月も立つた頃に此婦人、雞、一番を贈物に持  
 つ来て、ハットンに向ひ「貴方の仰に従ひました  
 所が夫も元の通りになりまして、外へ遊に出る事  
 もなく、いつも優しく親切にしてくれます」と嬉

し涙で話した、といふ話がある  
 善い事にも悪い事にも婦人の笑顔の力といふものは  
 非常なものである、此人を喜ばす能力の外に表  
 はれた笑顔といふものは婦人が世の良い秩序制配  
 の爲に影響を與へ得る様に天より受けたものであ  
 る、男といふものは女に造られる所の多いもので  
 あるから、女が己の才能を正しく用うれば、男を  
 して正しからしめる事が出来る、一家の主である  
 男は其快樂をそぐ事はあるが之を作る事は出来な  
 い、これは婦人の職分であるに婦人の特權である、  
 婦人に「愉快な」といふ所がなかつたら婦人の天職  
 は盡せない、それなら如何して婦人は愉快である  
 事が出来るやうか、身体、精神、行爲（座作進退、  
 氣質も含めて）の美なる事によつて出来るのであ  
 る、道學先生が「容貌美しき事」をけなすのは氣が  
 知れない、ヘバルト、スペンサーが「美貌何者ぞ  
 只一皮膚の事のみ」と言つたが、氏の言こそ實に  
 一皮膚の淺臺な言草だ、美貌が心を惹きつける力

を有するの「自然」の思召である、

道德上の欠點ある、才能の至らぬ人は、肉体の美

を上等の部には入れ難い、悪氣のない人の顔とい

ふものは愛らしいものである、愉快な笑顔は醜い

顔をもよくする、才智ある事善き性質を備へると

いふ事は理想的の美貌には必要な條件である、完

全に愛らしい顔といふのは、幸福な且つ有益な年

を送つたといふ思召の爲に得られる、心の平和、

及未來の嬉しい希望より成立すべきものである、

痘痕は犯した罪ほどに美貌にとりては敵ではな

い、誰しも一點の難ないといふまでに揃つた顔立

は持つてゐない、が次に掲ぐる規則を、場合に應

じ手加減をして遵奉したら、恐くは愉快な心であ

るであらう、

一、自ら制して柔和忍堪なれ

二、機嫌を變へぬ様にせよ、特に健康に異状ある

時、腹立ちし時、心亂れし時に注意し、禱によ

り又己の足らざる事及過を思ひて心を柔けよ

三、怒りて物言ひ又は振舞ふ勿れ己の言行に付て

祈りクリストならば此場合に如何に處すならん

かと考へ見よ

四、物言ふ事の價値ある如く沈黙も亦屢々貴むべ

き事を忘るな

五、他人に多きを望む勿れ、己がしかさるゝを欲

する如くに堪へ且つ許せ

六、答ふ時に鋭き言葉怒れる言葉を以てする勿

れ、つぐものは喧嘩ならん

七、最初の不和を用心せよ

八、優しき調子にて物言ふべし

九、機會ある毎に情ある、喜ばしげなる事を言ひ

ならへ

十、人々の氣質を呑み込み、少事なりとも凡ての

人に同情せよ

十一、例令些細の事と雖も多少他人を慰むるを得

ばそを忽にすべからず

十二、むつとし、疳癢を起し、又は急に不機嫌の

顔をかほする等の事ことを避まけよ

十三、己おのれを捨すて他に從したがふべし

十四、干渉かんせう、讒言ざんげんをする勿なれ

十五、善意ぜんいなりと思おもひ得えべき時には惡意あくいなりと誣しうる勿なれ

うる勿なれ

十六、子供こどもには優やさしく而しかも斷乎だんこたれ

此最後の規則このさいごのきそくは子供こどもに對たいするものなるが、夫おつとに仕わふるは又また甚はなだ六ヶむつしい所ところがある、が併しかし常に己おのれの機嫌きげんをよくし、常に愉快ゆきわいげならん事を努こめたなら

ば、其親切そのしんせつと優やさしい事ことで以もつて夫おつとを制せい服ふくする事ことが出来るできるであらう、男をとこは威をいを以もつて勝かち女をんなは柔なやを以もつて勝か

つべきである、ゼカリア、ホツヅンといふ人は

性せい來らい人の良よい柄がらではなかつた、で自分じぶんの歪ひがんが心こころ

から己おのれの妻つまを誠まことにつまらぬ者の様ように思おもつて、寧むづ

ろ奴隷どれいの様ように取扱とりあつかつて居ゐつた、妻つまの料理りょうりする食物じよく

は何時いづつでも氣きに入いらず、妻つまが骨折ほねさつて夫おつとを喜よろこばさ

うとする事ことは會々なな夫おつとの怒いらを買かふに過すぎなかつた、

かくして長ながい間ま夫おつとの不機嫌ふきげんを我慢がまんして忍しのんで居ゐつ

たが、或時あるとき妻つまの柔和じやうわが遂ついに勝利しょうりを占しめた、

或日あるひゼカリアは朝餉あさけを濟すませて用もちを帯おびて外出ぐわいしつした

たが、途中ちゆうちゆうで大おほきな魚いさなを買かつて妻つまに宛あて、家いへに送おく

り、夕餉ゆゆうけの膳ぜんにしつらへよと言いつてやつた、が何なに

う料理りょうりせよともいつてないので妻つまは其魚そのいさなを煮ゆてい

ゝか天麩羅てんぷらにしていゝか乃至ないはシチュウにしていゝ

のか分わからない、忠實ちゅうじつやかな此このの妻つまは尙なほ夫おつとを喜よろこば

さうと色々いろくな心こころを碎くだき、遂ついに色々いろくに料理りょうりして置おか

うと決心けつしんした、心盡こころづしの料理りょうりはやがて出來でき上ある、

すると彼女かのじよは裏うらの小川せうがわへ行いつて蛙かえるを一匹ひき捕とへて來き

て之これを針はりの中なかへ仕舞しまつて置おいた、その中なかに夫おつとは歸かへ

つて來きた、お皿さらは卓子ていぶの上に並ならべられた、夫おつとは例れい

によつて澁面じちめん作りつて不興ふきようげな顔かほつき「かい、己おのれの

買かつた魚いさなを受け取とつたかい」「ハイ」料理りょうりをして置お

いたるゝな、屹度きつとまた己おのれの口くちに合あはなぬ様ようにして

しまつたらう、(覆ひを取り乍なら)大抵たいてい斯ごとうだらうと

思おもつたんだ、何なんと想おもつてお前はマゝ天麩羅てんぷらになん

ぞしたんだい」「マゝ貴郎あな、私わたしは之これは貴郎あながお好すま

と思つて「そんな事があるもんか、己はこんな物は嫌だ、何故又お前は煮魚にしなかつたんだ、」  
 「オホ、貴郎や、此の煮魚をこしらいたら貴郎は天麩羅の方が良いと仰つてでしたから、私は只ね、貴郎のお氣に召す様にと思つて揚げたんです、ですが煮たのもこしらへて置きましたわ、」斯う言つてもう一つの覆をとると、見事美味さうに煮た魚が皿に盛つてある、此の見ても美味さうな様を見て、意地わるい夫は却つてむつつりし、  
 「何だ此んな料理！羨着なんか何んだい、之をシチュウにしないつて言ふのは何んといふ性の悪い女だい」妻は笑顔に愛嬌溢れて、すぐに立つてシチュウを夫の前に供した「私ね、貴郎、お氣に召す様にと思つて、お好きな之をこしらへて置きませしたの、」何に！好きな料理？こんな不味い物何んだい、こんなけちな物を並べ立てるより蛙でも煮ろさ、」  
 ゼカリアは何時もちういふ悪口をつくのが癖なの

で、今日も亦此手を喰はされるだらうと用意をして居た妻は例の鉢を持つて来て夫の前に明けた、大きな墓はニョツキリと横はつて居る、ゼカリアは流石に吃驚して飛び上つてた、妻は例の笑顔で優しげに「もうこれ御飯を召し上つてもいい、でせう、ゼカリアも是に至りつ愉快げに呵々と笑つて、今までは自分が悪かつたと妻に謝びて、其以來遂に愉快な家庭となつたといふ話である。  
 愉快な婦人といふ事は世に尤も必要な事でやる、愉快ならんが爲には常に我を捨て、素直に、親切で、常に真心から人をいたはらねばならぬ。  
 或者學者が自分の妻の事を和白砂糖の様だと言つた、色は白くないが甘いといふ意味であらう、美貌といふ事が全く不必要ではないが、其性質のスキートであるといふ事が最も肝要である。

